

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520056
 研究課題名（和文）非欧米型宗教間対話と政治状況の相関関係：東アジア・中東を中心にして
 研究課題名（英文）Correlative Relationships between the Non-western Interfaith Dialogue and the Political Situation: Focusing on East Asia and Middle East
 研究代表者
 小原 克博（KOHARA KATSUHIRO）
 同志社大学・神学部・教授
 研究者番号：70288596

研究成果の概要：

欧米のリベラル派において主流となっている宗教多元主義や多元主義的宗教政策は、しばしば、非欧米圏におけるファンダメンタルな価値を追求する「排他主義」的立場を進化論的な優位性から批判する。しかし、価値の衝突を避けるためには、多元主義的モデルを、近代社会の普遍的な宗教理解・政教理解と短絡すべきではない。また、近現代史における宗教理解は、ナショナリズムとの関係を見逃すことができない。それぞれの宗教は、置かれた土地に根ざそうとする根源的欲求を持つが、それが国家的な価値観に吸収されるプロセスにおいて、同化だけでなく反発・抵抗を生じるのであり、そのコンテクストの分析が平和構築のためには欠かせない。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	0
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	480,000	2,880,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：比較宗教学

1. 研究開始当初の背景

これまで、諸宗教間の対話は主に欧米のキリスト教を中心に進められてきた。そこで対話のための代表的なモデル形成がなされてきたが、様々な宗教が入り交じる現代社会において理想とされるのは、どの宗教にも絶対的な価値を認めない宗教多元主義の立場であった。これは啓蒙主義の精神の産物であるとも言える。

ところが、それぞれの宗教的価値を認め合

う寛容を前提にした、この考え方が、実際の市民生活の中では必ずしも有効に機能しないことが、9・11をはじめとする、近年のテロや暴動の頻発から、徐々に認識されるようになってきた。したがって、欧米圏の価値観と非欧米圏の価値観の根本的なすれ違いの原因とその政治的な影響力を究明しなければならないと考えた。

2. 研究の目的

欧米を中心に構築されてきた宗教間対話を批判的に考察し、これまで十分に研究の対象とされてこなかった非欧米圏の宗教間対話の取り組みの実態を調査する。それと同時に、欧米圏および非欧米圏の宗教間対話が、地域紛争・テロなどによる政治状況の変化から受けている影響を調べ、また関連各国の政策決定において宗教政策がどのように変容してきたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 文献による調査・調査

以下のようなテーマで文献を収集した。

- ①欧米における宗教間対話に関する文献。
- ②東アジア・中東における宗教間対話に関する文献。
- ③現代の宗教が現実の市民生活や政治に対し及ぼしている影響や、多文化的・世俗的市民生活から宗教が受けている影響について言及している文献。
- ④宗教的暴力や原理主義的な運動に関する文献。
- ⑤本研究課題の方法論を確立するための一助となるような、言語解釈学・比較文明論・比較政治学等の関連領域における文献。

(2) 取材による調査・研究

- ①国内外の関連学会に参加し、研究の動向を把握した。
- ②本研究課題に関連するテーマに取り組んでいる海外の研究機関や研究者への取材・調査を行った。

(3) 研究会の企画・実施

- ①大学院後期課程の学生と研究課題を共有し、研究の裾野を広げた。
- ②「京都・宗教系大学院連合」において、特に仏教と一神教の関係をめぐる研究会を立ち上げた。

(4) 研究成果の発表

- ①本研究の暫定的な成果を国内外の学会等で発表し、フィードバックを得た。
- ②研究成果を論文として発表した。

4. 研究成果

宗教間対話あるいは宗教の神学において、比較的広く用いられている類型に排他主義、包括主義、多元主義がある。そして宗教多元主義の立場からは、しばしば、排他主義や包括主義は克服されるべき前時代的なモデルとして批判されてきた。従来の宗教間対話モデルでは十分に評価できない事例として「原理主義」に注目し、それを欧米だけでなく日本近代史との関係において研究した。

「原理主義」と名指しされる宗教復興現象の多くに、多元主義的な啓蒙的価値・近代主義に対する抵抗の姿勢を見ることができるといえる。それは単にプレモダンへの伝統回帰ではなく、モダニズムの影響を多分に受けながら、それに包摂されない価値観を打ち立てようとしているという点ではポストモダンとさえ言い得る要素を有している。

そのことを近代日本宗教史と比較することを通じて、日本においても「ファンダメンタルなもの」を追求することによって、西洋近代と対峙しようとした類似の思想構造があることを認識するに至った。近代化を急いだ日本の場合には、プレモダン・モダン・ポストモダンが一時期に混在し、結果的に、そのことが戦争や植民地主義を正当化するイデオロギーにつながっていったことを考察することができた。

本研究の成果を要約すると以下のようになる。

(1) 従来の宗教間対話モデルの批判的考察

欧米のリベラル派の学者において主流となっている宗教多元主義や多元主義的宗教政策の問題点を示し、同時に、それを非欧米圏に適応することの難しさを示唆した。

特に欧米のモデルでは、宗教多元主義を優位の価値として、排他主義や包括主義的な立場を進化論的な立場から批判する傾向にあるが、非欧米圏（特にイスラーム世界）ではファンダメンタルな価値や立ち返るべき伝統は、それが欧米から見て排他主義的立場として批判されたとしても、しばしば日常的な価値の基盤をなしている。多元主義的モデルを、近代社会の普遍的な宗教理解・政教理解と短絡することは避けなければならない。

(2) 非欧米圏（特に近代日本）の宗教間対話の研究

特に日本の近代史における宗教政策を研究対象とし、宗教概念そのものが国策に大きく依存していることを明らかにした。宗教概念が国家により規定されることにより、国家的秩序や近代性に適合するものが、好ましい宗教とされ、適合しないものは前近代的な迷信とされた。このように近代において、宗教は国家との距離により序列化されることになった。

また、欧米とは異なる形で、近代日本においても宗教間対話はなされていたが、それが時には戦争協力へと結びついていったメカニズムを考察した。仏教とキリスト教は長らく敵対的な関係にあり、一方の他方に対する見方は「排他主義」に分類することができる。どちらも、相手の宗教に救済・解脱の可能性を認めようとはしないからである。他方、国体イデオロギー（＝公的領域）から見れば、

仏教にしてもキリスト教にしても、国家秩序の維持に役立つ限りにおいて、共に有用性を認めることができる。つまり、天皇を中心とした「包括主義」(＝公的領域)は、私的領域にある宗教に国家的意味・位置づけを付与する越境的な力を持っていた。この皇国的「包括主義」の内部にいる限り、それぞれの宗教がそれ自体としては「排他主義」的關係にあったとしても、皇国的「包括主義」というメタレベルから見れば、すべての宗教は「多元主義」的な相対的位置関係に置かれる。これは、見方を変えれば、「多元主義」もまた、国体イデオロギーに仕えることができることを意味している。しかし同時に、国体イデオロギーに従わないものは、見解の相違、多様性として認められるのではなく、国体的「多元主義」の外部へと放逐されるのである。このような構造は「日本型政教分離」の帰結として位置づけることができるが、同時に、現代インドや他のアジア地域の政教関係にも類似の構造を見いだすことができる。

(3) 政治的变化と他宗教理解の相関関係の研究

宗教間対話は、それぞれの宗教伝統の交流だけでなく、政治的な文脈に依拠すること、とりわけ、近現代史においてはナショナリズムとの関係を見逃すことができないことを明らかにした。それぞれの宗教は、置かれた土地に根ざそうとする根源的欲求を持つが、それが国家的な価値観に吸収される近代特有の現象を分析した。

ナショナリズムに対し批判的・建設的距離をとりながら、同時にキリスト教を祖型としない様々な宗教性(霊性)を射程に入れるためには、まず、ナショナリズムや宗教概念に負わされてきた超文脈的(trans-contextual)な特性を相対化する作業が必要である。そのため、キリスト教の場合であれば、「宗教の神学」(theology of religions)を中立的政治空間(それはしばしば排除の空間に転移する)の中で問うのではなく、「文脈化の神学」(contextual theology)と一体的に扱っていく視点が求められる(contextual theology of religionsの必要性)。しかし、それだけでは十分ではない。コンテクストを単純化せず、むしろコンテクストの重層性やダイナミズムを認識するためには、以下のようなフレームワークの設定が役に立つと思われる。

① intra-contextual theology of religions

「パトリア」および、それに起因する郷土愛や民俗信仰、さらには愛国心を神学的課題として対象化していく。その作業を通じて、ナショナリズムが穏健なものから過激なものまで、どのような価値や伝統の源泉を持っているのかを考察する。また、ナショナリズムが過激なものへと変移しないための条件

設定を、宗教との関係において模索する。

② inter-contextual theology of religions

特定の国家をコンテクストとする地域研究だけでは、ナショナリズムや宗教復興運動のグローバル化を説明することができない。国境によって区分することのできない、コンテクスト間の歴史的なつながりや流動性に対する共通認識を深めることを通じて、自国史の特殊性をより広い視野で位置づけ、国際社会に貢献する独自の道を模索することが可能となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 小原克博「信仰の土着化とナショナリズムの相関関係——「宗教の神学」の課題として」、『基督教研究』第70巻第2号、55-71頁、2008年、査読有り
- ② 小原克博「平和主義は生き延びることができるのか——グローバル・テロリズム時代の戦争論」、『まなぶ』(労働大学出版センター)第610号(2008年8月号)、20-24頁、2008年、査読無し(依頼論文)
- ③ 小原克博「近代日本における「宗教間対話」——宗教概念の形成と政教分離を中心に」、『基督教研究』第70巻第1号、41-54頁、2008年、査読有り
- ④ Katsuhiro Kohara, “A Critique of the Pluralist Model: ‘Exclusivism’ and ‘Inclusivism’ Revisited,” *Salvation and Pluralism* (Kyoto Joint Symposium of CISMOR and KIRKHS), Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions, p.80-89, 2008, 査読無し
- ⑤ 小原克博「宗教多元主義モデルに対する批判的考察——「排他主義」と「包括主義」の再考」、『基督教研究』第69巻第2号、23-44頁、2007年、査読有り
- ⑥ 小原克博「「宗教」概念の形成——近代から見える現代の課題」、『中央評論』59巻3号(No.261)、17-23頁、2007年、査読無し(依頼論文)

[学会発表] (計8件)

- ① 小原克博「信仰の土着化とナショナリズムの相関関係——「宗教の神学」の課題として」、日本基督教学会 第56回学術大会、2008年9月16日、関東学院大学
- ② Katsuhiro Kohara, “Comments on ‘Theological Issues in China’ by Professor Zhao Dunhua (Peking University)”, *Asian Three Countries International Symposium*, April 3, 2008,

Methodist Theological University, Seoul, Korea

- ③ 小原克博「宗教的多元性と民主主義の相関関係——リベラル・デモクラシーは諸宗教共存のための前提条件なのか?」、日本基督教学会 近畿支部会、2008年3月28日、同志社女子大学
- ④ 小原克博「現代社会における宗教研究の重要性」、International Scholars' Forum、2008年3月18日、上海師範大学(中国)
- ⑤ Katsuhiko Kohara, "Conflicts between religious and modern values in post-Meiji Japan: A comparative study for the concepts of democracy," Center for Strategic Research, March 1, 2008, Tehran, Iran
- ⑥ 小原克博「近代日本における「宗教間対話」——宗教概念の形成と政教分離を中心に」、日本基督教学会 第55回学術大会、2007年9月21日、京都大学
- ⑦ 小原克博「宗教多元主義モデルに対する批判的考察——「排他主義」「包括主義」の再考を通じて」、日本基督教学会 近畿支部会、2007年3月29日、神戸女学院大学
- ⑧ Katsuhiko Kohara, "Conflicts between religious and modern values in post-Meiji Japan: A comparative monotheistic study," *American Academy of Religion* (AAR), 2006 Annual Meeting, November 19, 2006, Washington D.C., U.S.A.

[図書] (計6件)

- ① 森孝一編著『ユダヤ教・キリスト教・イスラームは共存できるか——一神教世界の現在』明石書店、2008年、「「キリスト教世界」において何が共存を妨げてきたのか——「宗教の神学」の現状と課題」(297-320頁)担当
- ② 洗健・田中滋編『国家と宗教——宗教から見る近現代日本』上巻、法蔵館、2008年、「近代日本における政教分離の解釈と受容」(199-241頁)担当
- ③ 渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本2008』平凡社、2008年、「アメリカ大統領選挙を左右する福音派内部の動向」(124-127頁)担当
- ④ 森孝一編著、同志社大学一神教学際研究センター企画『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか——「ムハンマドの風刺画」事件の本質』明石書店、2007年、「ヴァチカン/世界教会協議会——ムスリムとの対話推進に向けての課題」(258-264頁)担当
- ⑤ 小原克博・中田考・手島勲矢『原理主義から世界の動きが見える——キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』PHP

研究所、2006年、「はじめに」「第一章」「第三章」「おわりに」(3-5, 17-40, 85-161, 285-289頁)担当

- ⑥ 金城学院大学キリスト教文化研究所編『宗教・科学・いのち——新しい対話の道を求めて』新教出版社、2006年、「「宗教と科学」に見る近代化の諸相——進化論を中心にして」(124-147頁)担当

[その他]

ホームページ

<http://www.kohara.ac>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小原 克博 (KOHARA KATSUHIRO)

同志社大学・神学部・教授

研究者番号：700288596

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者